

「旧き新世界」：ある成り上がり貴族の家系意識 をとおして見る近世初期のアイランド

山 本 正

はじめに

アイランドは地理的には大ブリテン島の西方にあり、ブリテン諸島の一角を占め、ヨーロッパの北東隅に位置している。かつ、この島は、12世紀の半ばに、時のイングランド王ヘンリ2世がローマ教皇ハドリアヌス4世からその領有権を認められて以来、イングランド王領であった。このように地理的にも歴史的にも、アイランドはまごうことなく「旧世界」に属している。しかし同時に、16世紀から17世紀にかけて、この島には、当時のイングランド人にとって蓄財と出世のチャンスがころがる、いわば北米大陸と同様の「新世界」としての側面も備えていた。いわば、「旧き新世界」とでもいうべき島、それが近世初期のアイランドであった。そして、じっさいにそのチャンスを最大限に利用して、ほとんど文無しの状態でアイランドに渡りながら、ブリテン諸島随一の資産を誇る大貴族として生涯を終えることになる人物がいた。初代コーク伯リチャード・ボイルである。では、アイランドの「旧き新世界」としてのアンビヴァレントな特性は、この成り上がり貴族の家系意識にいかん作用したであろうか。これを明らかにするのがここでの課題である。

1. 「旧き新世界」アイランド

12世紀以来イングランド王の領土であったとはいえ、16世紀の初めのアイランドにあっては、王領とは名ばかりのものであり、この島は実質的には軍閥が跋扈する世界と化していた。すなわち、アイランド先住のゲール系有力氏族の長、そして、12世紀後半から13世紀にかけてアイランドに侵攻・定着していったイングランド系大領主—こちらは「アイランド人よりもアイランド人的」な「墮落したイングランド人」などと呼ばれるようになっていく—、その両者がともに、もとはスコットランドから入ってきた「ギャロウグラス」と呼ばれる軍事専門集団を雇って、中小の領主を支配下に置き、イングランド王権から独立した地域支配権を確立し、軍閥化していたのである。そのため、イングランド王の代理であるダブリン総督を通して、国王の

威令が直接及んだのは、ダブリン周辺の「ペイル」(柵)と呼ばれた地域に限られていた。アイルランドの大部分を成す「ペイル」の外は軍閥割拠状態だったのである。

このようなアイルランドに対して、イングランドのテューダー王権は、1540年ころから本格的な「改革」を企てるようになる。その目的は、アイルランドにおけるイングランド王権の一元的支配の確立である。そのためには、軍閥を取り込み、かつこれを解体する必要があった。王権は硬軟両方の手段を使い分けながら、この目的の達成を目指していく。交渉と説得が柔軟な手段であり、具体的には後世の歴史家が名づけたところの「譲渡と再授封」⁽¹⁾、地方長官・評議会制度の導入⁽²⁾、「コンポジション」⁽³⁾などがある。一方、強硬な手段とはすなわち強権発動であり、反乱鎮圧、土地の収公・再分配そしてイングランド人の入植というかたちをとった。「改革」は部分的には進んだものの、あちらこちらで頑強な抵抗も招き、結局、最終的には、北部アルスタ地方のゲール系軍閥連合の反乱＝「九年戦争」(1594－1603年)の末に、軍事的な「再征服」によって、多大な時間と膨大な人的・物的資源を費やしたうえに、「改革」の目的はひとまず達成されることとなった。

ところで、先に強硬手段として挙げた土地の収公・再分配・入植—これらを合わせて、「植民」と呼ぶことにする—であるが、これには大きく3種類あった。国家事業としての「植民」、国家の公認のもとに私的事業者が行った「植民」、そしてもっと小規模かつ散在的な性格のものであるが、これも国家公認の私的活動として行われた隠匿地摘発である。

これらの「植民」は、テューダー王権によるアイルランド「改革」の手段であったが、同時に、イングランドの没落エリート、あるいは成り上がり志向のノン・エリートにとっては、土地の取得・蓄財の手段でもあった。近世初期のアイルランドが「新世界」であったというのは、この意味においてであった。じっさい同時期に北米植民を試みたイングランド西部のジェントリたち、たとえばリチャード・グレンヴィル、ハンフリ・ギルバート、ウォルタ・ローリなどは、アイルランドでの「植民」にも深く関与している。つまり、ヨーロッパのなかにあり、12世紀以来イングランド王領であったという点では「旧世界」であるけれども、一旗揚げようという16世紀イングランド人にとってはまさしく「新世界」だったのである⁽⁴⁾。

2. リチャード・ボイルの蓄財

16世紀のテューダー朝のアイルランド再征服は、その結果として3種類のエリートをアイルランドに成立させた。すなわち、先住のゲール系である「オールド・アイリッシュ」、中世以来のイングランド系である「オールド・イングリッシュ」、そして16世

紀半ば以降に流入・入植した新参のイングランド系「ニュー・イングリッシュ」である。アイルランドが「新世界」であったのは、いうまでもなくこの第3の新参エリート、「ニュー・イングリッシュ」にとってであったことはいうまでもない。なかでも「新世界」たる側面を最大限に利用した「ニュー・イングリッシュ」の代表格ともいえる人物、それがリチャード・ボイル（1566-1643年）である。イングランド・ケント州カンタベリ生まれのかれが、1588年にアイルランドに渡来したさいに所持していた金は、わずかに27ポンドほどだったという。それが晩年には、地代年収20,000ポンドというブリテン諸島随一の大地主にして、コーク伯爵を授爵し、ロンドンでチャールズ1世の枢密顧問官ともなっていた。まさしく立志伝中の人物である⁶⁾。

リチャードがここまで成り上がるには、もちろん相当の悪事を働いていることはいうまでもない。かれが有することになる資産は、その出自で分類すると大きく3つに分けることができる。第一に、最初の妻ジョオン・アプスリとの結婚を通じて得たアプスリ家の土地、第二に、ヴァージニア植民で有名であるが、アイルランド「植民」にも深く関与していたウォルタ・ローリから安値で買いたいたいたマンスタ地方の広大な土地、第三に、隠匿地摘発で得た土地である。この三番目にあげたものが、じつはリチャードのアイルランドにおける蓄財の第一歩であり、しかも、中央（ダブリン総督府）の役人と結託して、きわめて不正なかたちで取得したものであった⁶⁾。

3. リチャード・ボイルの家系意識

いくら資産を蓄えても、それだけでは、ただの成り上がり者にすぎない。エリート、すなわちジェントルマンとみなされる、ましては貴族に叙せられるほどの社会的上昇は達成できない。当時社会的上昇に必要なのは、なんといっても家柄であった。出自の卑しいものにとっては泣きどころであろう。この弱みを克服するもっとも近道は、家柄の高い家系の縁戚になることであった。じっさい、リチャードはあの手この手を駆使して縁戚づくりに励んでいる。まず、自らの結婚だが、最初の妻ジョオンが亡くなったあと、かれはキャサリン・フェントンと再婚した。このキャサリンは、アイルランド総督公設秘書官長（國務卿）を長年務め、隠匿地摘発でも要となる官職を保有する中央の高官サー・ジェフリ・フェントンの娘であった。リチャードはアイルランドに渡ったあと、この人物に近付いてパトロンとすることに成功し、隠匿地摘発でも結託していた。そのパトロンの娘を後添えとして得ることになったのである。またフェントン家は、チャールズ1世の有力廷臣で大法官、大蔵卿を歴任するサー・リチャード・ウェストンとも縁戚関係にあり、リチャードは妻を通してイングランドのエリート一族とのつながりをも誇示できることになった。

もっともわが身は一つしかないのであるから、自身の結婚による縁戚づくりには限りがある。そこでかれが利用したのは、自分の娘たちであった。かれは生涯に8人の娘をもうけているが、アイルランドにおける縁戚作りに限っていうと、二女のサラはメリフォントのムア男爵（のちドローイダ子爵）の息子トマス・ムアに、五女のキャサリンはダブリン大主教トマス・ジョーンズの孫で、ラニラ子爵ロジャー・ジョーンズの息子アーサー・ジョーンズに、六女のドロシはアーマーとダブリンの大主教を務めたアイルランド国教会の大物アダム・ロフトスの孫で、1636年にアイルランド大蔵卿となるサー・アダム・ロフトスの息子アーサー・ロフトスに嫁がせた。これらはいずれも、自らと同じ「ニュー・イングリッシュ」であるが、アイルランドにおける名家の地位を確立していた家系である。

しかし、興味深いのは、むしろ長女アリスと四女ジョオンのケースであろう。アリスはバリモア子爵（のち伯爵）デイヴィッド・フィッツデイヴィッドに、ジョオンはなんと第16代キルデア伯爵ジョージ・フィッツジェラルドに嫁いでいる。この両家はいずれも中世以来の「オールド・イングリッシュ」で、とくに後者のキルデア伯家は、イングランド系三大貴族のひとつに数えられる名門中の名門である。同家の長は15世紀末から16世紀初めにかけてはアイルランド総督職をほぼ独占的に歴任しており、1534年にヘンリ8世に対する反乱をおこして一時取り潰しの憂き目にあったものの、のちにメアリ1世に許されて家門を復興していた。では、なぜ、このような名家名門が、かれらからみれば素性のはなはだ怪しいリチャード・ボイルの娘などとの婚姻を受け入れたのであろうか。それはひとえに、かれらが経済的に逼迫して大借金を背負っていたからにほかならない。金持ちの成り上がりの娘と、経済的に逼迫した名門の息子の結婚、かの有名な18世紀イギリスの風刺版画家ホガースが描く「マリッジ・ア・ラ・モード当世風結婚」の世界を彷彿させる光景である。

では、リチャードにとっては、バリモア子爵家やキルデア伯爵家といった「オールド・イングリッシュ」と縁戚になることにどのような意味があったのだろうか。

そもそも、「ニュー・イングリッシュ」にとっての「新世界」であるアイルランドにおいて、「オールド・イングリッシュ」は、排除し、その富を奪うべき邪魔な存在のはずである。「ニュー・イングリッシュ」のリチャード・ボイルが、そうした先住民と縁戚関係を結ぶ必要性はいったいどこにあったのか。それは、やはりその家柄の古さ、伝統にこそあった。ムア家、ジョーンズ家、ロフトス家も「ニュー・イングリッシュ」のなかではそれなりに名家である。しかし、かれらはアイルランドに定着して、たかだかまだ三代目ほどにすぎなかった。バリモア子爵家やキルデア伯爵家とは比べるべくもないのである。出自の卑しいリチャードにすれば、「ニュー・イングリッシュ」

の名家との縁戚作りも大事であったろうが、それ以上に、中世以来の「オールド・イングリッシュ」の名門と縁戚関係を築く方が、その弱みを克服する点ではるかに重要だったのであろう。

しかし、そもそも「新世界」である地において、入植者がその伝統のなさを恥じて、先住民と縁戚関係を作らなければならないというのは、考えてみると奇妙なことである。北米でこのようなことは絶対にありえなかったであろう。これはまさしく、「旧世界」と「新世界」両方の顔をもつアイルランドであればこそ起こる話だったのである。

〈註〉

- (1) 「譲渡と再授封」 *surrender and regrant* : ゲールの族長にアイルランドにおける王の主権を認めさせるとともに、王はかれらを貴族に叙した。同時に、一族の有資格者のなかから族内の推挙で継承者を決めるゲールの制度—イングランド人はこれを「タニストリ」 *tanistry* と呼んだが、*tanist=tánaiste* とはゲール語で第二位の者という意味で、族長存命中から、後継者争いを避けるために、次期族長候補に族長から指名されていた者を指す—を廃して、イングランド的長子相続制度を受容させ、その領地支配を安堵した。
- (2) 地方長官・評議会制度 *provincial presidency and council* : 総督府のあるダブリンから遠隔の地方に、国王役人を長官として派遣し、当該地方を統括させようとした。地方長官には、軍閥の勝手な行動を抑制しうるだけの手兵がつけられた。ただし、一方的に抑えつけるだけでは、軍閥も収まらないので、軍閥を地方評議会のメンバーに取り込み、地方長官を補佐させて、当該地方の統治の責任を分担させようとした。中央から派遣される長官と現地の実力者で構成される評議会を両輪に、地方の平和（法と秩序）を実現するというのが、この制度導入の狙いであった。
- (3) 「コンポジション」 *composition* : 軍閥は、その私兵団維持のために、支配下の住民に恣意的に物資を徴発する権利や、兵士を民家に宿営させる権利を有した。これをイングランド人はゲールの慣習的権利であり、悪弊とみて「コインとリヴァリ」 *coyne and livery* と呼んだ。この軍閥の有した恣意的な慣習的権利を廃して、代わりに地域住民には、地方長官の手兵を維持できるだけの納税を定期的課すという仕組み。
- (4) 以上、詳しくは、拙著『「王国」と「植民地」—近世イギリス帝国のなかのアイルランド』（思文閣出版、2002）第1部「テューダー朝のアイルランド再征服」を参照のこと。
- (5) もっとも、わが国ではリチャード・ボイルその人を知る人は多くはあるまい。むしろ「ボイルの法則」—一定温度にある一定量の気体の体積は圧力に反比例するという—で知られる化学者ロバート・ボイルの父親と紹介した方が通りはよからう。
- (6) 隠匿地摘発の手続き、ならびにボイルによる不正について詳しくは、拙稿「あるアイルラン

ド貴族の成り上がり人生—近世イングランド人の旧き『旧世界』、川北稔・指昭博編『周縁からのまなざし—もうひとつのイギリス近代』(山川出版社、2000)、150—153頁を参照のこと。

〈参考文献〉

Ranger, T., 'Richard Boyle and the making of an Irish fortune', *Irish Historical Studies*, x, (1957) pp.257-297.

Canny, N., *The Upstart Earl: A Study of the Social and Mental World of Richard Boyle, First Earl of Cork, 1566-1643*, (Cambridge, Cambridge University Press, 1982).

山本正『「王国」と「植民地」—近世イギリス帝国のなかのアイランド』(思文閣出版、2002)。

山本正「あるアイランド貴族の成り上がり人生—近世イングランド人の旧き『旧世界』、川北稔・指昭博編『周縁からのまなざし—もうひとつのイギリス近代』(山川出版社、2000)、136—160頁所収。